

2023 年間キャンペーン 第2部 隊員OB 住み続ける思い編



「半農半X」。浦幌町を拠点に教育や食、スポーツなどの分野で地域課題解決や事業創出に取り組む一般社団法人「十勝うらほろ楽舎」は、今春から「農業」と、農業以外のやりたいこと「Xエックス」を組み合わせた新たな働き方を広めていこうと活動を始めた。

うらほろ楽舎の「半農半X」推進

この働き方に着目し、中心的に動いているのは、同楽舎専務理事の山内一成さん(44)。東京の大手企業を辞め、帯広に移住して7年。市農業インターンシップ(就業体験)事業を支援する「TASUKI有責任事業組合」(帯広市)代

■3 山内一成さん(44) 浦幌



十勝うらほろ楽舎の職員らと言葉を交わす山内さん(中央)。左隣は妻の小百合さんと娘の梨里帆ちゃん

農業土台に自身の夢追求

表など、さまざまな肩書を持つ。2021年から浦幌町で暮らす。現在、同楽舎に軸足を置き、経営全般を担う忙しい日々を送る。なかでは感じたのは、十勝農業の購入など費用が掛かる。十勝に興味を持ち、就農への意欲がある若者に多く出会ったが、都市近郊へ出て行ってしまうと、もどかしさを口にする。

経営が多く、移住して新規就農するには、土地や機械の購入など費用が掛かる。十勝に興味を持ち、就農への意欲がある若者に多く出会ったが、都市近郊へ出て行ってしまうと、もどかしさを口にする。

一方、半農半Xは「農業一本に絞らなくても農と関

やまうち・かずなり
1978年三重県四日市市生まれ。東京大学法学部卒。2002年にワタミグループのキャリアアドバイザーに入社。16年に帯広市の地域おこし企業人として移住。農作業を通じて居場所づくり事業を行う合同会社「ミナカシ」の共同代表や、UIJターなど担う「十勝フィールドアクションラボ」代表なども務める。

わる暮らしを実現でき、さらに段階を踏んで農業を学び、人間関係を築くことで第三者継承にもつながりやすい」と説明する。同楽舎は今年度新たに、土壌を改善しながら自然環境の回復を図る「環境再生型農業」にも取り組んでおり、町内の農家と協力し大豆栽培に挑戦。その担い手として、半農半Xを楽舎の職員2人と試験的に実践している。Xはライターやデザイナーなど多様。さらにモデルケースをつくろうと、4月に町の地域創生事業として半農半Xで働く地域おこし協力隊1人を迎えた。「自分が追求したいXと、生計を立てるための農業という働き方ができる

地域おこし企業人として帯広市に移住し、農作業に励む山内さん(2016年8月)



か、まずは法人内で挑戦したい」と語る。

市のインターン学生時代に参画

山内さんと十勝の縁は、東大生だった2000年。インターンを手掛けるベンチャー企業を仲間と運営、帯広市の農業インターン事業の立ち上げを知り、仲間と手伝ったのが始まりだ。卒業後も人材系の東京の会社で働きながら関わり続け、16年、TASUKIを設立。同時に会社の理解

で、社員のまま自治体に派遣される「地域おこし企業人交流プログラム」(現在は地域活性化起業人)制度を活用し、市職員として3年間、さらにインターン事業に関わった。同楽舎でも、こうした活動の中で「同志」として出会ったとする。

派遣期間終了後、山内さんは退社し、十勝に住み続けることを選択した。「当初から片道切符だと思っていた」とし、「収入に不安がないわけではなかったが、こっちの方が幸せだから。生活の質が高く、心が通い合う人に恵まれた」と笑顔を見せる。

今後も農業を軸に、十勝に人を呼び込む、住み続けようという活動が続けるつもりだ。「何回も十勝に来てもらえようという設計をし、社名にもある、より太い『タスキ』をつなげていきたい」(大海雪乃)